

平成 21 年 9 月 16 日現在

研究種目：若手研究(スタートアップ)

研究期間：2007～2008

課題番号：19820012

研究課題名(和文) ウィトゲンシュタイン哲学の成果と限界の検証

研究課題名(英文) Investigation of the Consequences and Bounds of Philosophy of Wittgenstein

研究代表者

重田 謙 (SHIGETA KEN)

大阪大学・文学研究科・助教

研究者番号：30452402

研究成果の概要：世界はこの私が見ている夢にすぎないという考え方は、「独我論(観念論)」と、一方、この私とは独立に世界は存在するという考え方は「実在論」と呼ばれている。本研究では、実在論 vs. 独我論という哲学上のこの難問について、後期ウィトゲンシュタイン哲学に実在論を決定的に批判する根拠を見出す(「成果」)一方で、ウィトゲンシュタイン哲学に基づいても独我論を証明することは不可能であることを示した(「限界」)。

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2007年度 | 1,070,000 | 0 | 1,070,000 |
| 2008年度 | 1,310,000 | 393,000 | 1,703,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,380,000 | 393,000 | 2,773,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学，哲学・倫理学

キーワード：ウィトゲンシュタイン，実在論，独我論(観念論)，独在，デカルトの懐疑，言語ゲームの地平，時間の矛盾／無矛盾，私的言語

1. 研究開始当初の背景

博士論文(「像の破壊と現出——『哲学探究』における規則論と私的言語論，その論証，帰結，そして限界——」)では、『哲学探究』*Philosophische Untersuchungen* の規則論と私的言語論の論証の妥当性を検証し，それに基づいて次のテーゼを導出した。

[テーゼR] 意味が成立するのは，ある主体が語を使用する(=その語の意味を理解する)とき，そのときにかぎられる。

[テーゼP1] 私たちが現実にもそのもとにある所与の条件においては，私たちに理解可能な意味は，自分以外の他人もまたそれを理解することが可能な意味それだけに限ら

れる。

[テーゼ P2] 私たちは、経験的には、実在論的な信念を抱かざるをえない。

[テーゼP3] 私たちが自分以外の他の主体の存在を認知する場合、世界において自分とその他者が並列的に存在していると、信じざるをえない。

そして最終的に、『探究』の限界を克服するための次のテーゼを論証した。

[テーゼS]私たちが自分以外の他の主体の存在を認知する場合、世界において自分とその他者が完全に並列的に存在している、と考えることは不可能である。

この論文執筆中に、これらのテーゼを採用することによって、実在論と独我論（観念論）をめぐる対立という哲学史上きわめて重要な問題がそもそもどのような問題であるのかについて独自の解明を与えることができるのではないかという見通しを得た。

2. 研究の目的

本研究は、ウイトゲンシュタイン哲学の成果を最大限に活用しながら、実在論と独我論（観念論）との対立に解明を与えることを目指し、具体的には、次の四つのテーゼを綿密かつ明快に論証することを端緒の目的として設定した。

- 1 世界は私が見ている夢ではないこと（＝実在論）は論証不可能である。
- 2 世界は私が見ている夢であること（＝独我論）は論証不可能である。
- 1' 世界は私が見ている夢ではない（＝

実在論）と信じることは不可避である。

- 2' 世界は私が見ている夢である（＝独我論）と信じることは不可避である。

3. 研究の方法

ウイトゲンシュタイン以降の哲学において「体系的言語哲学」(D. デイヴィドソン, R. モンターギュ, G. ハーマン等)と「ウイトゲンシュタイン派哲学」(S. カヴェル, T. S. クーン等)との間に分裂が生じた(D. ペアーズ)。「体系的言語哲学」はスコラ主義と無意味さに陥る危険をもち、一方「ウイトゲンシュタイン派哲学」は天才的なアフォーリズム作者の退屈な亜流となる危険をもっている。私見では、このジレンマを回避しつつウイトゲンシュタイン哲学の最良の部分を継承する方向が、少なくとも一つはある。それは、私たちの認識の条件について、体系的で完全な説明を与えるという目的を優先するあまり無意味な主張を紛れ込ませることをこのうえない慎重さで回避しながら、よく読んでよく考えるだけでだれもが理解できる仕方で明快かつ論証的な議論を積み重ねていくことである。要するに、体系的な説明を与えるという要請を満足するためだけに仮設される無意味な主張の混入（「体系的言語哲学」）と明快な論証の欠如（「ウイトゲンシュタイン派哲学」）とのいずれをも自覚的に回避しながら哲学的な思考を持続していくことである。本研究における哲学的考察は、この方法論に即して遂行された。

4. 研究成果

現時点までの研究の結果として到達した知見の概略を、具体的な研究成果である三つ

の論考との関連において整理する。

①まず、实在論と独我論（観念論）との対立を解明するために論証すべきテーゼ自体について、次のような修正を迫られた。

- 1 世界は「私」が見ている夢ではないこと（=实在論）は論証不可能である。
 - 2 世界は「私」が見ている夢であること（=観念論/独我論）は論証不可能である。
 - 3 世界とは〈私〉であること（=独在）は論証不可能である。
- 1' 世界は「私」が見ている夢ではない（=实在論）と信じることは不可避である。
 - 2' 世界は「私」が見ている夢である（=観念論/独我論）と信じることは不可避である。
 - 3' 世界とは〈私〉である（=独在）と信じることは不可避である。

（このテーゼにおける「私」は超越論的主観一般を意味している。一方〈私〉は比類なき唯一の存在を意味しており、じつはなんらかの記号によって表現することがそもそも不可能なものである（〈私〉という表記およびその基本的着想は、永井均の諸著作・論考から多大な示唆を得ている。『〈私〉の存在の比類なさ』，勁草書房，1998年，等参照）。

②論文「独在的な使用と経験的な使用－ウィトゲンシュタイン哲学によるウィトゲンシュタイン哲学批判の試み－」の第1節では、規則論と私的言語論の帰結を次のように定式化した。

規則論の帰結（RS）：

意味が成立する。⇔ 任意の主体がなんらかの記号を使用しその記号の意味を理解する。

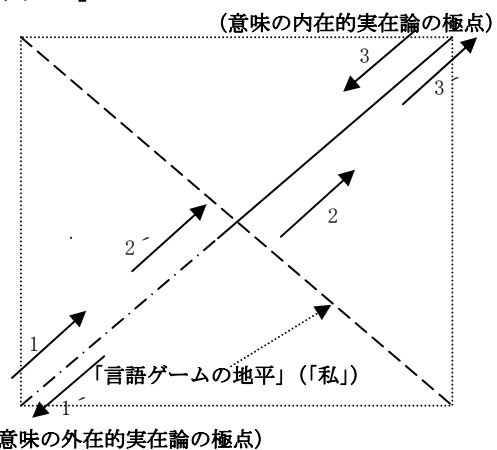
私的言語論の帰結（P1）：

私たちに理解可能な意味は、自分以外の他人もまたそれを理解することが可能な意味それだけにかぎられる。

ここでは、RSとP1が規定する後期ウィトゲンシュタイン哲学の枠組を「言語ゲームの地平 the plane of language-game」と名づけた。基本的に、RSはテーゼ1に、P1はテーゼ3に論拠を与え、「言語ゲームの地平」（【図式1】参照）の成立を根拠づけている。

しかし、その論文の第3節では、規則論そのものに基づいてRSを批判し、したがって「言語ゲームの地平」を批判する契機を見出すことを試みた。それはテーゼ2を論証するひとつの試みであると言することができる。

【図式1】



③論文「知識の懐疑－ウィトゲンシュタインとデカルトの対立－」では、拮抗する二つ議論を提示した。ひとつは、『確実性について Über Gewißheit』の議論に依拠しつつデカルトの方法的懐疑を（デカルトの意図を超え

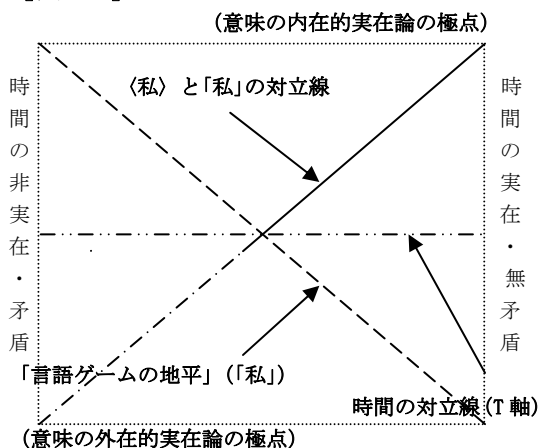
て) その論理的含意に忠実に遂行することによって不可謬な知識の不可能性を導き、逆説的な仕方では、知識に関する懐疑論的パラドックスを解消する試みである。それは RS に基づくテーゼ 1 を援用しながら、「言語ゲームの地平」における知識の成立を擁護する試みであると言える。しかし、「言語ゲームの地平」における知識の成立は、逆に、テーゼ 1^レ に根拠を与えることにつながるのである。

その論文の第二の目的は、デカルトの議論に、ウィトゲンシュタインによる批判を超える不可謬な知識の可能性を見出すことである。それは、テーゼ 3^レ とテーゼ 3 のそれぞれの根拠を示すとともに、私的言語論 (P1) によるテーゼ 3 の根拠づけに疑問を投げかける。

④論文「言語ゲームの地平における時間」では、マクタガートの定義に基づく A 系列 (A 系列を時間の本質だとすれば、時間) の矛盾の証明不可能性と、A 系列 (≡時間) の無矛盾も証明不可能性、の二つの論証を試みた。その論証は、ウィトゲンシュタイン哲学 (規則論) に基づくものと、ウィトゲンシュタインの議論とは基本的に独立した議論によるものから構成されている。

この論文の議論が妥当であるとするならば、それに基づいて【図式 1】を次のように補足できる。

【図式 2】



つまり「言語ゲームの地平」(規則論)においては、時間の無矛盾性の証明不可能性および時間の矛盾の証明不可能性のいずれにも根拠が与えられる。上の図式では、暫定的に、「意味の内在的実在論 (<私>)」の極 (右上の頂点) の側に、時間の無矛盾 (実在) を位置づけ、「意味の外在的実在論」の極 (左下の頂点) の側に、時間の矛盾 (非実在) を位置づけた。

本論文は、時間論とウィトゲンシュタイン哲学 (「言語ゲームの地平」) との接点を見出すささやかな試みにすぎず、時間論と先の 6 つのテーゼとの関連などの論点は、今後の探究のきわめて重要な課題であり、また本研究の深化・展開のための重要な手がかりとなるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

1. 重田謙, 知識の懐疑—ウィトゲンシュタインとデカルトの対立—, 平成 19-20 年度科学研究費成果報告書 (『ウィトゲンシュタイン哲学の成果と限界の検証』), 査読無, 2009 年, pp. 17-30.
2. 重田謙, 「言語ゲームの地平」における時間, 平成 19-20 年度科学研究費成果報告書 (『ウィトゲンシュタイン哲学の成果と限界の検証』), 査読無, 2009 年, pp. 31-57.
3. Ken SHIGETA, Skepticism of Knowledge—Conflict between Wittgenstein and Descartes—, *Philosophia OSAKA*, no. 4, 査読無, 2009 年, pp. 99-112.
4. 重田謙, 独在的な使用と経験的な使用—ウィトゲンシュタイン哲学によるウィト

ゲンシュタイン哲学批判の試みー, 『待兼山論叢』, 41号, 大阪大学大学院文学研究科, 査読無, 2007年, pp. 1-15.

[学会発表] (計 2 件)

1. 重田謙, 言語ゲームの地平における時間, 〈私〉の言語論的存立構造の哲学的研究
夏の東京ワークショップ, 2008年9月7日, 日本大学文理学部.

2. Ken SHIGETA, Dissolving Skeptical Paradox of Knowledge via Cartesian Skepticism completed by Wittgenstein, XXII World Congress of Philosophy, 2008年7月30日, Seoul, Seoul National University.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

重田 謙 (SHIGETA KEN)
大阪大学・文学研究科・助教
研究者番号: 30452402

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし